

都市部前期高齢者の向老期と現在の生き方の継続性

—認識レベルによる横断的検討—

ナカハラ ジュン フジタ アヤコ
中原 純*1*3 藤田 綾子*2

目的 本研究の主要目的は都市部前期高齢者の向老期の生き方と現在の生き方の認識が継続的であるという仮説を検証することである。そのために50歳から64歳の人々を対象として高齢期の望ましい生き方として尋ねられた3因子13項目を用いて、前期高齢者が回顧した向老期の生き方、および前期高齢者の現在の生き方を検討することの妥当性を検証し、向老期の生き方と現在の生き方の関連を検討することを目的として分析を行う。

方法 対象者は大阪府吹田市在住の前期高齢者の男女33,530名(男性15,643名、女性17,887名)から、住民基本台帳を用いて無作為抽出した男女1,325名(抽出率3.95%)である。調査方法は郵送法による質問紙調査であり、中原・藤田の生き方に関する13項目(向老期の生き方および現在の生き方)について1項目でも記入漏れのある回答紙を除いた結果、最終的に男女479名(平均年齢69.11歳、標準偏差2.64)が分析の対象となった。調査内容は、基本属性(年齢、性別、主観的健康状態、主観的経済状況、最終学歴)、高齢期の生き方、向老期の生き方とした。

結果 検証の因子分析の結果、向老期の生き方および現在の生き方の適合度はおおむね良好であった。すなわち、向老期の生き方および現在の生き方の認識を、中原・藤田で示された「変化・挑戦的生き方」「安定・防衛的生き方」および「同調的生き方」の3因子で捉えることの妥当性が示された。次に、向老期の生き方の各因子を独立変数、現在の生き方の各因子を従属変数とする重回帰分析を行った結果、向老期の「変化・挑戦的生き方」は現在の「変化・挑戦的生き方」と、向老期の「安定・防衛的生き方」は現在の「安定・防衛的生き方」と、向老期の「同調的生き方」は現在の「同調的生き方」とそれぞれ強く関連していることが示された。

結論 前期高齢者は、認識レベルにおいては、向老期の生き方を継続するような生き方を行っており、生き方の認識については継続性理論の妥当性が示唆された。

キーワード 前期高齢者、向老期の生き方、前期高齢期の生き方、継続性理論

はじめに

わが国における65歳から74歳までの前期高齢者においては、健康と経済的安定という幸福な老いを実現するための必要条件が満たされている人が多く、次に求められるのはライフスタイルについての個人の選好、すなわち、どのような生活をしたいかという好みの実現であると言

われる¹⁾。そして、ライフスタイルに関する研究の1つとして、向老期の人々を対象として高齢期の望ましい生き方を考える研究が行われてきた。方法としては、生き方に関する項目を抽出し、それらを包括的に捉える軸を導き出し、その軸に対する関連要因を探るというものである²⁾³⁾。これに対し、中原・藤田は、50歳から64歳の人々を向老期世代とし、彼らが望む高齢

* 1 大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程3年 * 2 同教授 * 3 日本学術振興会特別研究員

期の生き方は現在すなわち向老期の生き方と深く関連していることを示し、高齢者の生き方は高齢期に始まることではないことを示唆した⁴⁾。しかし、これらの高齢期の生き方に関する研究^{2)~4)}は、向老期の人々が高齢期はどのような生き方を望むのかということが大きな命題であり、高齢者自身を対象にして、高齢期以前の向老期の生き方と現在の高齢期の生き方の関係を検討した研究はない。そこで本研究では、前期高齢者を対象として、向老期の頃の生き方と現在の生き方を同一項目で尋ね、その関連を検討することで、上記の課題に一定の知見を得ることを目的としている。

中原・藤田は向老期世代を対象とした調査から、高齢期は向老期の生き方を維持できることが望ましい生き方であると考えられていることの重要性を述べており⁴⁾、生き方においては、向老期の生き方を維持できた方が、退職後の適応が容易であるという継続性理論⁵⁾の正当性が示唆されている。また、小田によると、高齢期の生活がそれ以前の生活と最適な継続性を保つことが高齢期の満足感をもたらすと述べ、その継続とは、その人自身が変化をどのように認識しているかが重要であると指摘している⁶⁾。つまり、ここでいう継続とは、活動の物理量的な客観的事象の継続ではなく、個人の認識としてのいわば意味づけの継続が満足感につながる可能性があるとして述べている。

そこで、本研究では前期高齢者の向老期と現在の生き方の認識は継続的であるという仮説を検証することを目的とする。そのために、50歳から64歳の人々を対象として高齢期の望ましい生き方として抽出された3因子13項目を用いて、前期高齢者が回顧した向老期の生き方、および前期高齢者の現在の生き方を検討することの因子的妥当性を検証し、向老期の生き方と現在の生き方の関連を検討する。

方 法

(1) 調査対象者と方法

本研究では調査地域として、大阪府吹田市を

選択した。吹田市は、2004年9月30日時点において、30歳代の割合が全国平均よりやや多く、75歳以上の高齢者の割合が全国平均よりやや少ないことを除いて、おおむね日本の年齢別人口構成割合と一致する⁷⁾⁸⁾。対象者は吹田市在住の前期高齢者33,530名（男性15,643名、女性17,887名⁹⁾）から、住民基本台帳を用いて無作為抽出した男女1,325名（抽出率3.95%）とした。

調査方法は郵送法による質問紙調査である。なお、調査への回答は自由であり、返信をもって回答への同意とする旨の手紙を添付した。調査時期は2005年1月から2月であった。その結果、644名（回収率48.60%、男性309名、女性332名、無回答3名）から回答を得た。その後、中原・藤田⁴⁾の生き方に関する13項目（向老期の生き方および現在の生き方）について1項目でも記入漏れのある回答紙を除いた。以上のような調査データの整理を行った結果、最終的に男女479名（平均年齢69.11歳、標準偏差2.64）が分析の対象となった。

(2) 調査内容

調査内容は、基本属性（年齢、性別、主観的健康状態、主観的経済状況、最終学歴）、高齢期の生き方、向老期の生き方とした。高齢期の生き方については、中原・藤田で示された高齢期の望ましい生き方に関する13項目⁴⁾に対して、「あなたは現在、どのような生き方をしていますか？」という教示を添えて、5件法（「1 全くそうしていない」～「3 どちらともいえない」～「5 とてもそうしている」）で質問した。また、向老期の生き方の認識については、現在の生き方の認識と同様の13項目に、「あなたは50歳～64歳の頃、どのような生き方をしていましたか？」という教示を添えて、5件法（「1 全くそうしていなかった」～「3 どちらともいえない」～「5 とてもそうしていた」）で質問した。なお、本研究においては、中原・藤田⁴⁾同様に、50～64歳を向老期とした。

表1 調査対象者の基本属性

(単位 人)	
	n (%)
性別	
1 男性	238 (49.7)
2 女性	241 (50.3)
主観的経済状況	
1 全くゆとりがない	50 (10.4)
2 あまりゆとりがない	143 (29.9)
3 標準的である	184 (38.4)
4 ややゆとりがある	92 (19.2)
5 非常にゆとりがある	9 (1.9)
欠損値	1 (0.2)
主観的健康状態	
1 健康で特に問題はない	160 (33.4)
2 病気はあるが日常生活に支障はない	298 (62.2)
3 病弱で日常生活に支障がある	20 (4.2)
欠損値	1 (0.2)
最終学歴	
1 小学校・中学校卒業	93 (19.4)
2 高校・高等中学校卒業	241 (50.3)
3 大学・短大卒業	121 (25.3)
4 大学院以上	10 (2.1)
5 その他	12 (2.5)
欠損値	2 (0.4)

表2 向老期の生き方と現在の生き方の検証的
因子分析 (n=479)

項目	因子負荷量	
	向老期の 生き方	現在の 生き方
第 因子；変化・挑戦的生き方 新しいことを始める いろいろなことをやってみる 変化のある暮らしをする 人間関係を広げる 社会のために尽くす 若い人とできるだけ付き合うようにする 努力してがんばるような生き方をする	0.79 0.73 0.66 0.72 0.56 0.63 0.46	0.78 0.74 0.70 0.74 0.55 0.56 0.44
第 因子；安定・防衛的生き方 人間関係のわずらわしさを避ける 近所付き合いのわずらわしさを避ける つらいことはすべて避けるようにする 気の合った仲間とだけ付き合う	0.83 0.64 0.44 0.43	0.69 0.63 0.52 0.37
第 因子；同調的生き方 周囲にあわせて行動する 何事につけ人の意見に従うようにする	0.93 0.36	0.41 0.73
適合度	GFI 0.941 AGFI 0.913 RMSEA 0.064	0.925 0.890 0.076

(3) 分析方法

向老期と現在の生き方の関連を検討するに当たり、まず、それぞれの生き方に関して、中原・藤田⁴⁾が50歳から64歳の人々を対象として抽出した因子を用いて解釈することが可能であるかどうか検討する必要がある。そこで、前期高齢者を対象とした向老期および高齢期の生き方の認識のそれぞれの項目に関して、検証的因子分析を行った。なお、統計ソフトはAmos 16.0を用い、適合度指標にはGFI (Goodness of Fit Index；以下、GFI)、AGFI (Adjusted Goodness of Fit Index；以下、AGFI) およびRMSEA (Root Mean Square Error of Approximation；以下、RMSEA) を利用した。適合度指標とは、仮説モデルがデータと矛盾しないかどうかを示す指標であり、GFI およびAGFIは0.90以上でデータの当てはまりが良く、RMSEAは0.05以下でデータの当てはまりが良く、0.10以上で悪いとされる⁹⁾。

生き方に関する因子を確認した後、前期高齢者を対象とした向老期と現在の生き方の継続性を検討するために、基本属性(性別、年齢、主観的経済状況、最終学歴)を統制した上で、向老期の生き方の各因子を独立変数、現在の生き

方の各因子を従属変数とする重回帰分析を行った。なお、統計ソフトはSPSS 16.0 for Windowsを用いた。

結 果

(1) 基本属性(表1)

まず、本研究の分析対象者の性別は、男女でほぼ同数であり、主観的経済状況は標準的な人が最も多いが、あまりゆとりがない人が3割程度、全くゆとりがない人が1割で、合計4割の人がゆとりがないと述べており、主観的なレベルにおいては経済的な安定を多くの人が確保しているとは前提にできないことが示された。また、主観的健康状態では、日常生活に支障がない程度の病気を持っている人と健康で特に問題がない人がほとんどであった。最終学歴では、高校・高等中学校卒業が最も多く、次いで大学・短大卒業、小学校・中学校卒業という順に多かった。

(2) 向老期と現在の生き方の因子構造の検討
(表2)

検証的因子分析の結果、向老期の生き方の適合度(GFI = 0.941, AGFI = 0.913, RMSEA = 0.064)は良好であり、現在の生き方の適合度(GFI = 0.925, AGFI = 0.890, RMSEA = 0.076)は必ずしも良好とはいえないが許容範囲内の適合度である。そこで、向老期および現在の生き方の認識を、中原・藤田⁴⁾で示された「変化・挑戦的生き方」「安定・防衛的生き方」および「同調的生き方」の3因子で捉え、後続の分析を行うこととした。なお、項目の該当因子への因子負荷量は表2に示し、それぞれの因子に対応する項目への回答を単純加算した得点を、各因子の得点とした。

(3) 向老期の生き方と現在の生き方の関係
(表3)

重回帰分析の結果、向老期の変化・挑戦的な生き方は現在の変化・挑戦的な生き方($\beta = 0.78$, $p < 0.01$)と、向老期の安定・防衛的生き方は現在の安定・防衛的生き方($\beta = 0.75$, $p < 0.01$)と、向老期の同調的生き方は現在の同調的生き方($\beta = 0.57$, $p < 0.01$)とそれぞれ強く関連しており、異なる生き方とは関連をしていないことが示された。

考 察

生き方の項目に関する検証的因子分析の結果から、前期高齢者の現在の生き方および回顧した向老期の生き方は、変化・挑戦的生き方、安定・防衛的生き方、同調的生き方の3次元で捉えられることが示された。すなわち、児玉らが提案した16項目³⁾から中原・藤田が選定した13項目⁴⁾は、質問の仕方によらず同一内容の因子を抽出する安定した生き方の項目であると考えられる。

次に重回帰分析の結果から、前期高齢者の現在の生き方は向老期の生き方と深い関連を持っていることが示された。すなわち、向老期に新しいことに積極的に挑戦したり、変化のある生

表3 向老期の生き方と現在の生き方の関係
(重回帰分析, $n=464$)

	標準化偏回帰係数		
	従属変数(現在の生き方)		
	変化・挑戦的 生き方	安定・防衛的 生き方	同調的 生き方
基本属性			
性別(男性 = 0)	0.00	0.04	0.06
年齢	-0.06*	0.03	0.02
主観的経済状況	0.04	-0.01	0.05
最終学歴	-0.08**	0.04	-0.10*
向老期の生き方			
変化・挑戦的生き方	0.78**	-0.01	0.06
安定・防衛的生き方	-0.02	0.75**	-0.06
同調的生き方	-0.03	0.01	0.57**
調整済みR ²	0.61**	0.56**	0.36**

注 1) * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$

2) 性別(男性 = 0, 女性 = 1)はダミー変数を用いた。

3) 最終学歴は先行研究同様、小学校・中学校卒業を1、高校・高等学校卒業を2、大学・短大卒業および大学院以上を3とし、その他は欠損値として分析に用いた。

4) 独立変数; 性別, 年齢, 主観的経済状況, 最終学歴, 向老期の変化・挑戦的生き方, 向老期の安定・防衛的生き方, 向老期の同調的生き方

5) 従属変数; 現在の変化・挑戦的生き方, 現在の安定・防衛的生き方, 現在の同調的生き方

き方をしていた人は前期高齢者となった現在も新しいことに積極的に挑戦し、変化のある生き方をしていること、向老期に近所づきあいや人間関係を避けるような生き方をしていた人は現在も人間関係を避けるような生き方をしていること、向老期に周囲に合わせた考えを持ち、行動していた人は、現在も周囲に合わせた考えを持ち、行動していることが示された。一方で、向老期に新しいことに積極的に挑戦したり、変化のある生き方をしていた人が高齢期になって人間関係を避けるような生き方をしたり、周囲に合わせた考えを持ち、行動するような傾向がないことも示された。このことから、Achley⁵⁾や小田⁶⁾が述べるように、前期高齢者は向老期の生き方を継続することが示されたと考えられる。

現在の前期高齢者が比較的向老期の頃の生き方を継続しているという本研究の結果は、現在の生き方の継続を望む多くの50歳から64歳の人々⁴⁾の結果の傾向と一致するものである。このことは、人は高齢期になったからといって生き方に関する考え方を急に変えるのではなく、

一貫していて継続性のあるものであることを示している。すなわち、生き方の認識については継続性理論が正しいことが示唆される。さらに、継続性理論の仮定では、継続的な生き方を行うことで満足感を得ることができるとされるため⁶⁾、今後、生き方の継続的な認識について、生活満足度等との関連でさらなる検討が必要とされる。

その他、本研究は向老期と前期高齢期の横断的な検討であり、向老期の生き方に関しては思い出しバイアスがかかっている可能性や、現在の生き方と同一の質問紙で尋ねたため、キャリアオーバー効果（繰り延べ効果）の可能性も考えられる。今後縦断的な検討を行うことによって、生き方の継続性を明確に示す必要がある。また、本研究で分析対象となった前期高齢者は質問紙に回答し、返送することが可能な人のみであった。そのため、主観的健康状態が比較的良好であり、認知機能が良好である前期高齢者であった可能性がある。すなわち、本研究の結果は、身体的健康状態や認知機能が良好な前期高齢者における結果であると考えられる。

謝辞

本研究における調査は平成16年度ヒューマンサイエンス基金（代表；藤田綾子）の助成により実施したものである。

文 献

- 1) 安藤孝敏．多様化するライフスタイル．古谷野亘，安藤孝敏編．新社会老年学．東京：ワールドプランニング，2003；153-63．
- 2) 古谷野亘，井上勝也，岡本多喜子，他．都市壮年における老後の生活像と準備行動（1）- 老後の生活像 - 老年社会科学 1985；7：97-108．
- 3) 児玉好信，古谷野亘，岡村清子，他．都市壮年における望ましい老後の生活像 老年社会科学 1995；17：66-73．
- 4) 中原純，藤田綾子．向老期世代の現在の生き方と高齢期に望む生き方の関係 老年社会科学 2007；29：30-6．
- 5) Atchley RC. A continuity theory of normal aging. The Gerontologist 1989；29：183-90．
- 6) 小田利勝．サクセスフルエイジングの研究．東京：学文社，2004．
- 7) 総務省統計局．平成16年10月1日現在推計人口 2004．（<http://www.stat.go.jp/data/jinsui/2004np/index.htm#05k16-b>）2005.5.15．
- 8) 吹田市．年齢別人口 2004．（<http://www.city.suita.osaka.jp/kobo/seisaku/page/006559.shtml>）2005.5.15．
- 9) 狩野裕，三浦麻子．グラフィカル多変量解析（増補版）．京都：現代数学社，2002．